

地蔵

川崎ゆきお

「これこれ、そこなお人」

島田は声をかけられ、自転車を止めた。深夜のことだ。

「毎晩見かけるが、いったい何用かな？」

島田は声の主を捜した。

「ここじゃよ。路肩をよく見よ」

地蔵が立っている。小学生ほどの背丈で、もう顔面は風化している。

「気になってのう。つい声をかけてしもうた」

島田は別に驚かなかった。その回路が開いているためだろうか。

「散歩です」

「散歩とは歩きのことではないのか」

「歩くように走っているのよ」

「では、徒歩ではなく、走りじゃ。やはり散歩とは呼べんぞ」

「でも気持ちも運動量的にも散歩なんです」

「何を見てまわっとる」

「別に何も見てません。前は見ていますが」

「おかしなお人じゃ。まあ、だから声をかけたのだが…」

「そういうあなたは地蔵ですか」

「そうじゃ」

「地蔵さんこそ何をしているのですか」

「いや、もう何もしておらんのだよ」

「昔からここにいるんでしょ？」

「村がなくなってからやることのうてな。ここは街道が通っておった。村の入り口じゃ」

村らしい風景はこの一帯にはなく、住宅地になっている。

島田は地蔵に化けたキツネの話を思い出した。そういうものに遭遇するようでは、自分も駄目だと感じた。浮世離れのし過ぎなのだ。

「お前様には声がかげやすかった。困ったことがあるのなら相談にのるよ」

島田はサラ金の無人ボックスを思い出した。お地蔵さんが立っており、お金に困った人に無人の機械で融資するという仕掛けだ。

「さあ、話してみなさい」

「地蔵の声が聞こえるのが困ることかもしれません」

「信心のないお人よのう」

「どういうシステムなんです？」

「先程も言うたであろう。暇なんじゃよ。見捨てられた地蔵なんじゃ」

「放置地蔵なんですね」

「このままでは、わしが彷徨うことになる。だから、わしに仕事をさせておくれな」

島田は翌日同じ場所に行くと、地蔵が立っていた場所は工事中になっていた。

了